

魯文の報条(二)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 元 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6608

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



魯文の報条 (二)

高 木 元

十九世紀末に生きた戯作者である魯文の遺業の大半は、『安愚楽鍋』や『西洋道中膝栗毛』を除けば、纏まった著作物を形成することなく無数の片々たる紙片として残存してきた。具体的には、錦絵の填詞や報条引札、都々逸などの俗謡本や他作者の著書に投じた序跋などである。此等は売文の所産であるが故に文学的営為とも見做されず、誰にも顧みられることはなかった。

しかし、報条や填詞などには趣向を凝らした戯文が駆使されており、魯文をはじめとする十九世紀末の戯作者達の足跡を明らかにするためには必要不可欠な資料群なのである。したがって、此等の散佚してしまいそうな資料群を、現時点で可能な限り蒐集しておく必要がある。そこで、前号に引き続き今回は人間文化研究機構国文学研究資料館（以下「国文研」）が所蔵する貼込帖を中心に、魯文の書いた報条を紹介しておく。

資料名 「東京横浜明治初期料理店及び商店引札」（ラ三―三四）

形態 白茶布表紙折本仕立一帖（三十六・八×五十二・八糎）

注記 引札八十二枚を帖仕立てにしたもの。うち魯文のものは十三枚。裏に歌舞伎番付四十二枚あり。

資料名 「魚網開店の告條」(ユ九一〇二)

形態 一枚摺り(十七×十七糎)

注記 この資料は、台紙に貼られた状態で一枚だけで保存されている。(翻刻許可 国資学第二五七号)

【一八】

免御人力車

御披露

天地ハ萬物の逆旅にして、光陰ハ百代の過客なり。古人燭を秉て夜を遊ぶハ、限りある身のたのしみにて。懷中時計の後朝に。短き袖の袂を別ち。川蒸氣の上手遊びに。刺を違へぬ開化の人情。其処に目的西洋商個。老舗し業の片手間に。人車と思ひ月花の眺に凝し通家のお指揮。バ子を添たる駕乗ごゝろ。運動によき工合の修理。両輪に因む両國に。今般開業。仕れば横濱上下近郷近在。花の街の御通行。雪の旦の御遊山なりとも。定價の外におもた増。おいそぎ即時に引出す手筈。さハあれ酒手ハ受申さず。坂に車の懈らねバ。物見車の御客様達。廻る轍のしげくに。御來駕を冀ふになん

戲作車

假名垣魯文述



定價

一壹里 金貳朱

但一日貸切御旅、行貸切仕候

車力御酒手、一切受不申候

來ル八月下旬、開業仕候

風雨の節ハ上覆ひを用ひ候間少しも

さはり無御座候但油くさき匂ひ一切無之候

兩國米沢町壹丁目

西洋堂

【一九】

牡丹紅葉を散しに畫し。柴刈獸の山鯨ハ。むかし噺の古臭しと食新しき西洋風味。彼洗沢の皮を去り。調理ひらけし牛肉の
功能。多きハ汗棟充。うしと見し世の今更戀しく。貴賤こそつて賞味の別品。四季をさらはぬ養生食も。取分冬の肉蒲團。腎
を補ひ氣力を倍す。驗を見世の御目印。太しく建る高旗を。目的に賣出し當日々。相かはらすの御來駕を主人に代りて糞ふ個
ハ。

牛の煉藥黒牡丹の製主

假名垣魯文述

○牛肉鍋 御老人前 同玉子やき 銀五匁
三百七十式銅

○同すき焼 同 七 百 文 ○同茶碗蒸 同五匁

赤牛味噌漬 同甘露煮 御好 次才

藥品 ○白牛らく ○白牛乳 ○たけり
○粉名メリキ ○きうたん

來ル九月五日か三日の間賣出シ鹿景呈上

牛肉賣捌所

浅草御藏前片町

日の出惣吉

浅草 ぎやうにくりさばきところ
 元祖牛肉賣捌所
 壹斤 價金二朱ヨリ

賣出御披露
 うりだしごひろう

凡牛肉の功能あるや。近來西洋窮理家の。食料經驗のみならず。既に張華が博物誌にも。曆然として其條あり。彼紀元千七百九十六年。英國ヘルケレイの地に。多く野飼して。専ら人身の補藥とせしより。各国の蒼生是を用ひて。壯健なること比するに物なし。も。目今文明開化進み。我他具に此肉を。嗜ハ御代の徳澤に。潤ふ舖の繁昌から。御謝がてら一斤より。小賣に至る精肉の。價も廉の元直を限り。四辺故障にかけ構はず。お口に餘る安賣ハ。商ひめうり意地と張。先外々と召あがり。競てお試あれかしと。兩肌を脱ぐ主人に代り。例の牛食。假名垣魯文述

牛肉鍋 御老人前 同すきなべ 六百銅

肉入玉子焼茶わんむし 是迄が一倍 下直奉差上候

牛肉岩石團子 風味至てやはらかにて御老人 子供衆にも御口に叶てよろし

うしのねりやく
 黒牡丹 脾胃をおきなひ氣力をまし 曲もの入 價金一朱より

閏十月

十八日より

五日の間賣出し

龜景差上仕候

浅草御蔵前片町
 日の出惣吉 精調 無類

【二二】

御披露 ごひろう

軍配團扇の風に靡き。御鬘負連の御取廻しに。相撲茶屋とは嗚呼がま式守。行司にあらで當時の活計。めうがに叶ふ大入に
四本柱の普請も出来。おん客様の御顔觸。よろしき日取に宅開き。是から出世の階段上り。彼横綱の横濱御連を。摩利支天と
も祈りまうせば。春冬場所の御發駕に限らず。四季折々の御遊山にも。御立寄を希ふ

源坊に代りて

假名垣魯文伏述

東西南北

相撲茶屋

東京東両國
回向院前

伊豆源拜

【二三】

梅

よい向と

梅素

素椽

隣

儲の外や

亭

梅に月

會席割烹家

開舗告條

松の隠居と境を接へて千歳の色を共に契り梅屋敷を隣にして鶯の人來と告るハ竹垣結ひし眺望の亭茅の軒端に舊年の塵を
雪ぎて新し春の設けの會席料理俄におもひ月と梅景色調ふ迫にハゆかねど鮮魚ハ隅田の川波に洗ひ茶水ハ墨水を釜に湛

え四時のながめを混雑こみませて織オリなす錦にしきとみやこ鳥トリこの名所などころをお目的めあてに東風こちふ吹く頃ころの馬車ばしや人車じんしや夕風ゆふかぜそよぐ川かは蒸氣じやうき家根やね舩屋形ふねやかたの御遊山おんあそびにも御訪問ごひんがを冀あるじふと主人かほに代りて述のぶるにこそ

戲草文げそうぶみの

假名垣なまがきおるか伏裏ふし 

葛飾寺嶋梅屋敷續

松の隱居隣家

梅隣亭

活刺鮮魚
薄茶割烹

來ル正月廿二日／賣初仕候

【三三】

御披露ごひろう

天地一大の戲場あめつちひとつならバ。活業なりばいも又ひとつの。小劇場しばみといふべきなり爰こゝに纒わづかの新店舞臺しんみせぶたい。暖簾のれんの天幕軒てんまくのきにかす。開店かいてんの初日觸しよにちぶれハ。金平糖こんへいたうの名題なだいを挙あげ。砂糖さとうを土礎あまくちさんまいの甘口三昧かみくちさんまい。余あまの立者たちものの老舗らうぽと比べて云いはは新顔しんがほの鳥居とりを越こぬ稲荷町いなり。旭あさひの社やしろハ近くとも。利益りやくの設もうけハ薄衣うすくもあつ。厚あつき恵めぐみの御最負おんもといを。力ちからに賣出うりだす新賣商人しんまいあきんど。作者さしやと役者やくしやの二役兼ふたやくかねて脚色しやくむしんせ新製しんせい新狂言しんきやうげん。樂屋がくや化粧けしやうの氷掛ひりがけハ。彼かの白粉おしろいの白しろきに耻はぢす。挽茶入ひきぢやいりの渋しぶいこなし。杏仁種あんずねの粹すあなるとりなし。所作しよさのかる焼瓢しやくひやん菓くだ子ご。並ならべて申まうさバ言立いひだての。なかよなか／＼尽つきせぬしなく。念入ねいれ差上さあけたてまつれバ。見世みせびらきの初日しよにちより。江戸えとの花道はなみち八方はつぱうより。人ひとの山幕やまかく押分おしわけ／＼。砂糖漬さとうづけのぎつしり詰込つめこみ。當利卷あたりまきの永當えいたう／＼。御光駕ごくわうが御用向ごようむきを希こひねがふ。其為そのため告條こじやうさやうにこそ。

主人に代りて

假名垣魯文伏裏

菓子／＼／＼／＼／＼／＼引

○風氷掛金米糖類

○新製胡广入和合豆

○極製砂糖漬品々

○極新製當利卷

○新抹茶入利休□

○風流子安糖

○極製南京糖

○新製うくひす卷

○風流から衣

○誂品下直ニ奉差上候 以上

来ル二月十九日見せひらき

大門通油町新道

當日麓景奉差上候

小見川成太郎製

【二四】

船料理

椀焼

御ぜん

柳舟

御壺人前ニ付
價銀七匁五分

口條

加茂川の水雑水ハ。七段目の幕切にて。東京川の船料理ハ。川開きを初日とせり。一面の浪幕に高脊船の大道具。個節の合方に吹よ川風あがれよ調理の夏季を旨と酒肴の按排今年も安のお手輕専一。彼蝙蝠の柳舟味はひ与三と御評判を。

御一人前一通

銀拾五参候
其外御好次才

吸もの○口取○あらい

鉢さかな○茶碗盛

假名垣魯文
伏てまうす

五月／明日より

元やなぎ橋 柳 船

【二五】

流行りゅうが 吉例賣出し 十月九日より
牛肉ぎゅうにく

傳染病でんせんびやうのリンテルホストに。斯かくまで開ひらけし牛肉ぎゅうにくの景氣けいきを墮おとせし。禍まがも唯新聞たゞしんぱんの風説ふうせつのみにて。家畜かちくの病やみし噂うはさも聞きかず。聊いざ、か障さはれる事ことなきハ。開かい化くわますく。進すすむの祥瑞しやうずい。肉食にくしやくはやりハ國益こくえきの。一ひとッ鍋なべにも十人十種じゅうにんじゅうしゆ。タレ食たれくふ蒸むすもすき焼やきまで。油あぶらの乘のりし活計なりはひめうり。煮出にだすすソツフの骨折ほねをりを見せの看板黒牡丹かんばんこくばたん。正味調進しやみてうしんさし上申あせバ。相變あひかはずの御入車ごにりしやを。日ひの出での舖みせに一杯いっぱいきげん快こころよきま、伏ふしてモウス

牛肉 生なまり 壹斤ニ付 銀五匁五分 金三式 朱朱

牛肉鍋	御意人前 三百銅
同すきなべ	同 六百文
同甘露煮	同 金一朱匁
しやも鍋	同 四百銅

牛屋雜談安愚樂鍋 著述のいとま 假名垣魯文記

御蔵前 片町東例 日の出 両日／龜景呈上仕候

【二六】

賣初告條

假名垣魯文述

酒竹に雀ハ品よくとまると、彼一節の唱歌に因み、晴の宿の店前を、笹の合手にした切雀お宿ハ何処とお尋ねの、御目印の酒林、洗ぎ盥に踏かくる。二足の草鞋の餘慶を量り、升目たつぷり下直を吉とし、都て諸品ハお口に入りて、軽イ葛籠の上々吉甞、醉心よき極樂ハ、何処の果と杉酒屋、お三輪が唄ふ馬士節の、馬喰町の旅籠酒と、内證ばなしの街に高く、店直ひらき當日より、御評判を冀とまうす

鋪開 來ル六月明日ヨリ

馬喰町三丁目 近江屋善兵衛

【二七】

下り漬物類告條

野暮にも香の物ありと。世の諺を故事漬の。貯へ□□澤庵と。称へハ古き大根の総名、奈良漬瓜の蔓のびて。ひろごる名代の西瓜漬、竹の子達の御歯にも。逢合傘の松茸ハ苔を賞する。花落胡瓜。味も甘露の古味酥に。流山茄子漬こんで。丁度朝鮮瓜といふ。コハ別品の小蠶を精淨製に。駿河漬、富峯にハ四時の雪降豆、御客様は福徳の豆なを祈る。硯園蠶。都麴子につけ置ハ。甘きのみハ辛子漬。加減ハ平井が守口大根。引ぬく跡を榑王の。光り羞明天王寺蠶も粒を撰立し。らつきやうの舛諸味漬もろく、菜づけハ大蕪の。干枚漬にも尽せねバ。袴の儘で一才御披露

漬もの一式にて會席を奉るといふ、主人に代り難波の句調に倣ひて

假名垣魯文



待ちあひ
待合にまつ一服ハ薄茶にて

お口採をバ何にせんじ茶

浅艸並木町

平井製

【二八】

開化進みて産業全く。茲に開店彼処に賣出し。商利ハ矢よりも疾きを旨とし。手柄ハ仕勝と競へる中に。東京の地を放れ業。彼傳信機の綱渡り。浮雲見へても賣込し。白帆の暖簾を御當所へ。かけ渡したる船橋屋。製方に氣を播磨沔。高砂町の名にし。おふ。風味ハ得手に帆をあげて。品もろともに出張の開店。當日かけて馬車道の。往還繁く御求め。太田町の多少に不限御用。向を冀ふになん

浅草閑人

あるじ
主人に代りて

假名垣魯文述



極製蒸菓子 干菓子るゐ
しなく

精製練羊羹金玉糖

千鳥せんべい 御せんしるこ
しなく

横濱高砂町二丁目
東京浅草雷門内店

船橋屋國太郎

來ル四月明日開店

麓景差上申候

有合御料理

告條

假名垣魯文述

電信機の軒をなれ、鎌道の境を隔ちし、隅田の下流のむかふ越、繁花を招く河一重、人力馬車の喧き、街を少し放れ里、日々新聞の鮮魚の買出し、魚肆朝市の郵便は、音信絶ぬ、主人が勉強、味噌吸もの、誇香ならで、お口が曇らぬ寫眞鏡、店開港の當日より、川蒸氣車の淀みなく、千万艘の御來臨を、待人船と帆々欲張てまをす

本所外手町

お馬やかし南角

魚綱

来ル九月明日開店

○極製菓子数品

見世びらき

御披露

告條

假名垣魯文戲述

九年何苦界十年花ころも。本来喰と悟りたる粹も甘味を好みの菓子臺。お酒ハこれでおつもりの雪の肌のとく。極製口とり手取の新舗。風味ハ程もよしはらや。客のくるわの繁昌に。あやかる工風をねり羊羹。遠山形に二ツ星。下戸と上戸の仲の町。左右へ向も宵の床。夜半の口舌ハしら玉もち。風にまかせる青柳まきは。浮川竹の包物。或ハ折詰御重づめ。花の江戸町一円に。すみから角町。京町の。けふ店びらき御披露の。その引札の文の使。彼かすていらの狐色。九郎助稲荷の神かけて。御取立をねがひ上。まゐらせ鹿漏の文章も。菓子類だけに甘口と。さだめし仰も有平まき。とやせん斯や煎餅落厂。稍く趣向をおこしの品々。何れも上製上物ぞろひ。お見立のうへ御用向を。門口に立牛皮に代りて。お袖を引て願ふになん

来ル十一月十三日十四日

神田橋御門外角

見せびらき

青柳製

柳青

景物として御風味

奉差上候

【三二】

来三月十八日

書畫小集

柳橋万八樓ニおいて

開筵

本日 諸先生揮筆

糴上に筆を染る文雅の諸大家に雪を頭の仙翁も有へく三日月眉の閨秀も有へし墨の池に龍踊り硯の海に亀遊ふ是そ錦に添る花流る、水に桜の香汲や隅田の名鳥もこゝに聚る両國川酒も有又絲も又ありやなしやハ愛顧の君たち光駕ありて試たまへ

岳亭春信

柳亭種彦

光齋芳盛

為永春水

補弼

鶴亭秀賀

會幹

関根只誠

喜樂軒一庭

梅素玄魚

春亭京鶴

扇面亭

鈍亭更

催主 假名垣魯文再拜

【三三】

伏ふして 稟まうす

鈍亭魯文述鈍

故ふるきを温たづねて新あだしきを、知しるとハ老おのれ舗のれんの暖ぬる簾を、此この新しん店せに分わかつて、古ふる衣ぎを尋たづねて新き着ぎを見みだす。土と手て物ぶ買かひの類たぐひ等らにあらず。さ
 れバ苟まじに新あたらにして、日ひ々あつた新あたらなる大おほ都と會えの、流りう行かう変へん格かく星せい移うつり、原げん野や忽たち棟むねを重かさね、軒のきを並ならべし新しん地ちの結けつ好かう、そが繁はん榮えいの餘よ沢たくに染そま
 んと、當たう所よに響ひびく御おん菓くわし子すひん数ほん品け、原ほん舗おとハ音おとになり響ひびく、雷かみ神なり門もんの内うち店みせより、此この筋すぢ違ちがひの御ご門もん外げへ、罷まかり出で見み音おとハ一いつ体たい分ぶん身しん、普ふ請しんハ殊こと
 に新あたらしけれど、名な目まへハ故ふるきお馴なじ染みだけ、時じ々きま々まの書しよ画わく會わい御おち茶や席せき一いつ夕せき話わたりの、おん口くち取とり、或あるハお土ち産さんお重ぢう詰づめ、四し季き折おち詰づめハ御お好この次み才さい
 下げ戸こ様さま方がたハ申まをに及およばず、上じやう戸ごの君きみのお口くちにも、叶かなふが則すなはち新しん製せい工く風ふう、價あたいハ専もつら低ひくなせど、風ふう味みハ高たかき出で吹ふの、花はな香か汲く出ですお
 茶ちやの水みづ、その川かは下しもを流ながる、船ふねと、城みやぎ門げの橋はしをお目め的てきに、多た少せうに限かぎらず御ご用よう向むか、仰おほ付つけられ下くだされなバ、是これぞわたりに船ふな橋はし屋や、
 おりえて開ひらく出で店みせの繁はん昌しょう、幾いく未み長ちやうく御お取と立だてを、主ある人じに代かり願ねがふものハ、故ふる事ぎを温たづねて新しん板ばんの合あ卷まきに綴つりなす。新しん味まい作さく者しやが甘あま口ぐちに
 織織江江 江

○新製菓子類 御口取物御折詰等 奇麗仕立奉差上候

御茶席むし菓子類 数品

極製羊羹類 数品

新製葱宝珠饅頭 十二付巻包

二色あん隅田川 十二付八十文

三色あん窓の月 十二付五分

腰高まんぢう 十二付五分

新製福和内 二十文

右之外新製数品御引物御進物暑寒御見舞

物并御赤飯あるひハ御 祝儀御包菓子之御誂如何様
にも取急キ御間ニ合差上可申候

雷神門出見世

筋透御門外新地 船橋屋織江

巳九月明日より、當日麓景奉差上候

掲載資料一覧

凡例

一、【一】～【一七】は前号掲載分

一、請求番号の後の〈 〉は枝番号か折数（丁数）を示す。

一、参考文献として挙げたものは以下の通りである。

『引札 繪びら 錦繪廣告 江戸から明治・大正へ』（増田太次郎、誠文堂新光社、一九七六）

『引札 繪びら 風俗史』（増田太次郎著、青蛙房、一九八一）

『江戸のコピーライター』（谷峯藏、岩崎美術社、一九八六）

『幕末・明治のメディア展 ―新聞・錦絵・引札―』（早稲田大学図書館編、一九八七）

『大阪の引札・繪びら』（大阪引札研究会編、東方出版、一九九二）

『広告で見る江戸時代』（中田節子著・林美一監修、角川書店、一九九九）

『明治のメディア師たち』（日本新聞博物館、二〇〇二）

- 【一】 貸本屋「山城屋金太郎」 佐藤悟氏蔵、毎日新聞社新屋文庫（三七〇（K01））、『引札繪びら錦繪廣告』 図85
- 【二】 新吉原「邑田海老屋」 佐藤悟氏蔵
- 【三】 御菓子屋「船橋屋」 佐藤悟氏蔵
- 【四】 書画会「本町東助」 佐藤悟氏蔵
- 【五】 寿司・菓子屋「藤原満吉」 佐藤悟氏蔵
- 【六】 料理屋「石井亭」 佐藤悟氏蔵
- 【七】 古書画「知漢堂木免屋」 佐藤悟氏蔵
- 【八】 浴衣手拭「伏見屋榮治郎」 佐藤悟氏蔵
- 【九】 初舞台「坂東百代」 佐藤悟氏蔵
- 【一〇】 会席料理「昇運亭」 佐藤悟氏蔵
- 【一一】 待合「成田屋登代」 佐藤悟氏蔵
- 【一二】 鳥料理「珍鳥亭」 佐藤悟氏蔵
- 【一三】 化粧品「佐野」 佐藤悟氏蔵
- 【一四】 料理屋「宇治橋」 佐藤悟氏蔵
- 【一五】 西洋料理「會圓亭」 国文研蔵（ラ三一三四（九））、『引札繪びら錦繪廣告』 図84、『引札繪びら風俗史』 図105、『江戸のコピーライター』 図59、『幕末・明治のメディア展』 図183。
- 【一六】 酒屋「石崎酒店」 『引札繪びら錦繪』 図88
- 【一七】 植木屋「安五郎」 毎日新聞社新屋文庫（三七〇（K33））、『明治のメディア師たち』 図152、『引札繪びら錦繪廣告』 図90

- 【一八】力車「西洋堂」 国文研蔵（ラ三一三四（二））
- 【一九】牛肉賣捌所「日の出惣吉」 国文研蔵（ラ三一三四（二））
- 【二〇】牛肉賣捌所「日の出惣吉」 国文研蔵（ラ三一三四（二・十））
- 【二一】相撲茶屋「伊豆源」 国文研蔵（ラ三一三四（三））
- 【二二】會席割烹「梅隣亭」 国文研蔵（ラ三一三四（三））
- 【二三】菓子「小見川成太郎」 国文研蔵（ラ三一三四（七））
- 【二四】船料理「柳船」 国文研蔵（ラ三一三四（十一））
- 【二五】牛肉賣捌所「日の出」 国文研蔵（ラ三一三四（十一））
- 【二六】酒焼酎「近江屋善兵衛」 国文研蔵（ラ三一三四（十四））
- 【二七】下り漬物類「平井」 国文研蔵（ラ三一三四（十七））
- 【二八】菓子「船橋屋國太郎」 国文研蔵（ラ三一三四（二十二））
- 【二九】有合御料理「魚網」 国文研蔵（ユ九一〇二）
- 【三〇】菓子「青柳」 『江戸のコピーライター』 図 60
- 【三一】書画会「書畫小集」 『広告で見る江戸時代』 87頁 図四 「万延元年九」
- 【三二】菓子「船橋屋織江」 南木コレクション（天守閣二三七二）、『大阪の引札・絵びら』 90 「安政六年以前」

付記 『安愚楽鍋』の舞台となった牛鍋屋「日の出」の報条三種【一九】【二〇】【二五】については、嘗て拙稿「魯文の滑稽本」（『日本文学』二〇一六年一〇月号）で紹介したが、誤植などが在るので便宜上再掲した。また、今回紹介した国文研蔵貼込帳（ラ三一三四）の九折に貼られている「西洋料理・會圓亭」は、前号の掲載資料一覧【二五】と同一で紹介済みである。